

初期マルクスと青年ヘーゲル派

——初期マルクス研究に関する一展望——

重 田 晃 一

まえがき

本稿は、フランスにおける古くからの初期マルクス研究家であるオーギュスト・コルニユの大著、『カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルス、その生涯と著作、一八一八年—一八四四年』⁽¹⁾について、初期マルクス研究の視角から若干の考察を加えたものである。

その表題、目次からもほぼ推察されるように、⁽²⁾右の書物はマルクス、エンゲルスの生い立ちからはじまつて、一八四四年の『独仏年誌』の諸論稿、つまり彼等がはじめて共産主義の立場に到達するに至るまでの政治的実践的立場、および精神的思想的立場の発展を克明にたどつたものである。しかも著者自身の言葉によれば、この書物は、「すぐれてK・マルクスとF・エンゲルスの青年期における精神的発展をとりあつた」(S. 2)ものとして、その考察の力点は伝記的事実の考証よりも、むしろ彼等の精神的思想的立場の発展の究明におかれていたのであつて、初期マルクス研究の視角からみても、そこではまことに興味ある数多くの問題が提起されている。

もとより我々は、コルニユの初期マルクス理解の特質として幾多の点を指摘することができるが、本稿では、これまでの諸研究と較べてこの書物を著しく特徴づけていると思われる、初期マルクスと青年ヘーゲル派との関連の問題を中心に、若干の考察を試みてみたい。

註(1) 著者 Auguste Cornu (一八八八) の経歴については詳しくことはわからなく、『アインハイト』誌一八五五年八号の伝えるところでは、彼は一九五二年にフンホルト大学に客員教授として招聘され、以来同大学で文化史の講座を担当してゐる。初期マルクス研究に関連した著書、論文としては次のものがある。

- ① Karl Marx, *L'homme et l'œuvre; de l'hégélianisme au matérialisme historique*, 1818-45, Paris 1934.
- ② *Moses Heß et la gauche hégélienne*, Paris 1934.
- ③ *Karl Marx et la révolution de 1848*, Paris 1948.
- ④ German Utopianism; "True" Socialism, *Science and Society*, vol. XII, No. 1, PP. 99-112.
- ⑤ Le socialisme utopique allemand, *Revue Socialiste*, n° 17-18.
- ⑥ *Karl Marx et la pensée moderne*, Paris 1948.
- ⑦ Les oeuvres jeunesse de Karl Marx 1840-1844, *La Pensée*, n° 54, PP. 66-74.
- ⑧ *Essai de critique marxiste*, Paris 1951.
- ⑨ *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk*, Bd. I, 1818-1844, Berlin 1954.
- ⑩ *Karl Marx, die ökonomisch-philosophischen Manuskripte*, Berlin 1955.

本稿でとりあげたのは⑨の書物であつて、本書の第三章まではフランス語版が一九五六年にでている。この版の序文によれば、本書は部分的には一八三四年の著作『カール・マルクスの青年時代』(①)の著作のことか? を批判的にとりいれた、とされている。

(2) 参考までにこの書物の目次その他をあげておく。この書物は総頁数五六八頁の大著であつて、「序論」、第一章「時代像」、第二章「幼年時代と修学時代」、第三章「青年ヘーゲル派運動の形成」、第四章「政治的急進主義」、第五章「ライオン新聞」、第六章「共産主義への移行」、第七章「独仏年誌」の八つの部分からなり、最初に簡単な「まえがき」と最

初期マルクスと青年ヘーゲル派(重田)

後に詳細な文献目録とがついている。

一

すでに述べたように、本稿は、初期マルクスと青年ヘーゲル派との関連を問題の中軸にすえることによつて、コルニユの初期マルクス理解の特質をさぐるうとするものであるが、ここではまずそのてがかりとして、これまでの諸研究におけるこの問題の解釈の一端に触れることにより、この問題のとりあつかいをめぐるコルニユの位置を明らかにしておきたい。

これまでのドイツの市民的立場に立つた思想史において、ヘーゲル主義の解体と若きマルクスの思想とを近代思想史の中に有機的にはめこもうとした恐らくは最初の試みとして、我々はレヴィットの『ヘーゲルからニーチエ⁽¹⁾へ』をあげることができる。だがレヴィットのばあい、問題への精神史的接近の底を一貫して流れている彼に特有の近代精神の発展図式—つまりヘーゲルによる近代社会の問題性の一応の総体的把握はマルクスとキェルケゴールによる左右からの批判によつて解体せられ、ニーチエにその最終的帰結をみいだすという—は、必然的に若きマルクスと青年ヘーゲル派との質的差異を見失うに至ることは、すでにルカーチもはつきりと指摘しているところである。ルカーチは言う、「彼〔レヴィット〕は主要な方向をたんにヘーゲルから発する一つの途〔ニーチエに至る途〕において眺めるものだから、ヘーゲルの左右の批判者、ことにキェルケゴールとマルクスは彼のばあい同じ平面で出合い、あらゆる問題における彼等の対立性は、—根本方向は本質的に似かよつていて、—たんなる主題設定の差異としてあらわれる。こういう見方をとるために、レヴィットが解体時代のヘーゲル派(ルーゲ、パウアー)、フォイエル

バッハおよびマルクスの間にもはや類似傾向の内部でのニュアンスしか看取せず、質的対立を見ていないことは、おのずから理解されることである」⁽²⁾と。

他方ルカーチの鋭い洞察は問題を異つた方向に理解している。こゝではヘーゲル哲学の観想的性格の青年ヘーゲル派による克服の試みは、フィヒテの主観的観念論への後退(B・バウアー、ヘス)とフォイエルバッハによる直観的唯物論への移行、といふ二つの対蹠的試みにおいて把えられ、マルクスはこの二つの小ブルジョワ的ヘーゲル批判の一面性の克服と史的唯物論、弁証法的唯物論の確立によるヘーゲル批判の最終的完成の中に定位せしめられている。⁽³⁾したがつてまた、若きマルクスの思想的発展の追求の中軸は、当然にも若きマルクスにおけるヘーゲル批判の試みの発端、具体的には青年ヘーゲル派によるヘーゲル批判の限界の克服の試みにおかれることになる。このルカーチの特徴をもつともよくあらわしているのが、彼の長文の論稿「若きマルクスにおける哲学的発展(一八四〇—一八四四)」⁽⁴⁾である。ところがこの論稿では、初期のマルクスの論稿から後期のマルクスにおける史的唯物論、弁証法的唯物論の確立を必然化する契機を析出することに分析の焦点がおかれ、また彼の思想史の一特質ともいふべき小ブルジョワ・イデオロギー批判という課題に制約されて、その結果、初期マルクスと青年ヘーゲル派との関連についていえば、そこでは両者の差異性、対立の面が前面に押し込まれて、その同一性、関連の面は後景に退けられている。したがつて一評者も言うように、ルカーチのこの論稿にたいしては、「初期にはもつとヘーゲルや青年ヘーゲル主義の臭みをおびているマルクスを画くことが重大ではないか。このようにとらえてこそ、マルクスがそれらについて史的唯物論をうちだす過程がよりはつきりとつかまれてくるし、真実のマルクスに接近しうるであろう」⁽⁵⁾という疑問が当然に提起されるであろう。とすれば、ここに初期マルクスと青年ヘーゲル派との関係のうち、その同

一性、関連の側面がマルクス主義的立場からいまだ一度問いなおされねばならないし、我々はこの点でコルニユの著書から多くのことを学びとることができるように思われる。

このような問題意識に立つたばあい、我々はこの書物における初期マルクスへの接近方法の特徴として、次のことを指摘することができるであろう。そこではかの時代の社会経済的機構それ自体の分析と、この分析にもとづく時代の問題性の析出といった方法操作は殆ど省略され、この問題性をいわば与えられたものとして前提したうえで、これにたいして様々な立場からなされた解答ともいいうべき自由主義的、社会主義的諸イデオロギーの展開に、分析叙述の多くがさかれ、若きマルクスの精神的思想的発展もこれらの諸イデオロギーの展開の流れの中で扱えられている、ということこれである。しかも著者はこれらの諸イデオロギーの中でとりわけ青年ヘーゲル派のそれを重視することによつて、若きマルクスの発展を青年ヘーゲル派の成立、解体の過程とかかわらせて理解しようとしている。したがつてコルニユのこの書物では、青年ヘーゲル派運動の中で次第に彼等との対立を深めながら、一步一步と自己自身の新しい世界観の創造に向つて着実な足どりを進め、やがて共産主義者としてこの運動より抜けだしてくる若きマルクスの姿がきわめてヴィヴィッドに描きだされているのであつて、我々はこの点に本書の最大の特徴をみいだしたい。

註(一) K. Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche*, Zürich und New York 1949. なおレヴィットは「ソーシャル・リサーチ」誌一九五四年夏季号に“Man's alienation in the early writings of Marx”なる論稿を寄せている。しかしながらそれは一九三四年の論文「ウエーバーとマルクス」の第二篇に若干の手をほどこしたものにすぎないのであつて、本稿の主題との関係では前者によるのが便利である。

(2) G. Lukács, *Die Zerstörung der Vernunft*, Berlin 1954 S. 14. 邦訳'上巻一三頁。

(3) Vgl. G. Lukács, a. a. O. S. 147. 邦訳「上巻一二七頁参照。

Vgl. G. Lukács, *Der junge Hegel*, Berlin 1954, SS. 635-641.

前者においては理論と実践の問題をめくり、後者ではヘーゲルにおける「外在化」の止揚をめぐつて三者の関係があつかわれてゐる。

(4) G. Lukács, zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840-1844), *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 2 Jahrg. Nr. 2, 1954. なおこの論稿については平井俊彦氏のすぐれた紹介、『経済論叢』七七巻第五号]がある。

(5) 平井俊彦、前掲稿七五頁

二

まずコルニユが青年ヘーゲル派の基本的性格、およびこの運動の推移をどのように理解しているかについて考察してみよう。

ヘーゲル学派の青年ヘーゲル派と老ヘーゲル派との分裂を推し進めた歴史的社会的な基盤として、コルニユは、ヘーゲル自然哲学を根柢から覆した自然科学の驚くべき進歩と、資本主義の新たな前進（国際的には七月革命、国内的には関税同盟の結成を指標とする）によるブルジョワジーの力の強化、およびこの力の自覚にもとづく絶対主義にたいする不満の増大とを指摘している。このような歴史的社会的基盤を土台としてヘーゲル学派の分裂は起るのであるが、彼によれば、その分裂の直接の契機は、ヘーゲル哲学に内在する革命的な方法と反動的な体系との間の矛盾、つまり「それにしたがはしては如何なる限界、如何なる究極目標も指定されえない不断の進歩を生みだすところの歴史の生成に関する弁証法的な見解」と「プロシヤ国家とキリスト教とを絶対理念の体化となす哲学体系」(S.128)との間の矛盾にあつた。⁽¹⁾青年ヘーゲル派に属する人々は、すでにハイネによつて提起された「進歩的秘教的なヘーゲル」

と「反動的公教的なヘーゲル」との区別というヘーゲル批判の方法を承け継ぎ、⁽²⁾このような立場から、ヘーゲル哲学のさきにあげた矛盾のうち保守的な体系をすてて、理性国家の形成に至るべき歴史的弁証法的な発展観のみを真にヘーゲルのなものとした。かくしてコルニユはこの派のイデオロギーの革命的側面を高く評価することにより、「保守的な右派」にたいして青年ヘーゲル派の基本的性格の一面を、当時ようやく上昇運動を開始しつゝあつたブルジョワジーの自由主義的渴望にヘーゲル哲学を適合させようとする試みにおいて把握、これをヘーゲル哲学における「自由主義的な左派」として規定している。

だが彼等も当時のドイツの諸イデオロギーに特有の限界を免れることができなかった。コルニユによれば、この限界の基盤はブルジョワ的支柱の弱さにあり、彼はその原因をドイツの資本主義的發展の後進性にもとづくブルジョワジーの相対的脆弱性と、プロレタリアートとの対立によるその保守的側面の早期の発現に求めている。このブルジョワ的支柱の弱さのために、彼等もこれまでのドイツの思想家と同様に、「政治社会上の問題の解決を精神上の領域に移す」(S. 130)という誤りにおちいり、そのことはまた彼等の運動に「すぐれて空想的な性格」(S. 130)を与えずにおかされた。彼等のこの傾向を一段と強めた要因として、コルニユはこの派における理論的批判の絶対化とでもいへべき傾向をあげている。彼等は一面においてはヘーゲル哲学の確固たる信奉者として、「歴史の生成を規定する精神の全能を決して疑わなかつたし、政治的社会的發展に合理的性格を与えるためには、国家と社会における非理性的なものを発見し」(S. 130)、これを批判によつて除去すれば充分だと考えたこと、これである。これらの諸側面を考慮に入れることによつて、コルニユはこの運動の基本的性格—階級的性格を、総括的には、小ブルジョイイデオロギー、それも社会より遊離孤立したインテリゲンチヤのそれとして規定している。

コルニユによれば、青年ヘーゲル派運動は、当時のドイツの政治経済社会上の諸状況に触発されながら、次の三つの時期を經過する。

第一期—青年ヘーゲル派運動の成立の基本的契機はすでに指摘した。その具体的事情として彼は二つの系列に注目している。一つはシュートラウスに端を発するキリスト教批判の展開であつて、問題の中心はヘーゲルにおける宗教と哲学の同一化の批判におかれた。いま一つの系列は、ヘーゲル哲学の観想的性格の克服をめざしてチェスコフスキーによつてなされた、この哲学の「行為の哲学」への改造の試みであつて、その狙いは、ヘーゲルによつて過去と現在にのみ制限された歴史の弁証法的運動を未来にまで拡大することにあつた。B・パウアーは以上の二系列の試みを独自の形で統合することによつて、これを「批判哲学」——「自己意識の哲学」にまで展開した。その批判の直接の対象はキリスト教であつたが、プロシヤ国家をキリスト教国家として把えることによつて、彼はやがて独特の形でプロシヤ国家そのものの批判に進んでいった。他方ルーゲはチェスコフスキーの「行為の哲学」を承けて継ぎこれをさらに発展させることによつて、ヘーゲルの保守的体系の二大要素のうちのプロシヤ国家の絶対化をとりあげ、プロシヤ国家の直接的な批判に向つた。

第二期—ところで青年ヘーゲル派運動は、そのやり方は様々であれ、批判がプロシヤ国家の批判にまで全面化するにつれて、プロシヤ絶対主義体制の集中攻撃を蒙り、こゝにそれは二つのグループに分裂した。「自由人」に属する人々(B・パウアー、E・パウアー、シュティルナー)は今や政治活動を二義的でくだらぬものとし、高級な精神の所有者はこのような活動に携わる必要はないとして、ますます国民—彼等の所謂「大衆」—より遠ざかり、「大衆」を進歩の障害と考えた。その結果「彼等はますます主観主義と個人主義の傾向をもつに至り、遂に環境への

坊きかけの無力さを完全に表現する無政府主義」(S. 35)におちこんだ。

他方プロシア絶対主義の反動政策は、プロシア国家を絶対理念、世界精神の体化と考えるヘーゲル流の理念国家観の非現実性を暴露したが、急進的な青年ヘーゲル派の人々（フォイエルバッハ、ルーゲ、ヘス、マルクス、エンゲルス）は、フォイエルバッハの「ヒューマニズム」の立場に移ることによつてこの危機を乗り越え、一段と急進化の途を歩んだ。だがそのさいこのグループの中で、マルクス、エンゲルスはフォイエルバッハから、ヘーゲル観念論の唯物論への顛倒の側面と、「ヒュマニズム」の側面（人間の自己疎外の分析と揚棄の視角）とをともに受け継いだのたいして、他の人々は「ヒューマニズム」の側面しか受け継がなかつた。しかも彼等の中で、ルーゲ、フレューベル等は明らかに「ヒューマニズム」を無規定的な民主主義の意味に解釈したが、これにたいしてヘス、バクーン等はこの「ヒューマニズム」に空想的な無政府主義的共産主義の色どりを与えた。とはいえーコルニユは言う「このような意見の違いも、ヒューマニズムなる合言葉におゝわれてなおはつきりと前面にあらわれないで、その結果、すべての民主主義的な意見をもつた青年ヘーゲル派人の協力が可能であつた」(S. 44)。

第三期—このような同床異夢ともいうべき協力は束の間の小春日和であつて、やがて彼等のそれぞれの「ヒューマニズム」が明確な自己規定を受けるにつれて、こゝに意見の対立、衝突が生れた。この衝突は共産主義の評価をめぐつて、まずマルクス、エンゲルス、ヘスと他方におけるルーゲ、フレューベルとの間に起つた。ヘスについては、彼は徐々に後に「真正社会主義」の名に概括される流れに向つて進んで行くが、コルニユはこの段階ではなおヘスとマルクス、エンゲルスとの協力、親近関係を強調している。ともあれコルニユによれば、この時期（「自由人」との分裂に続く自由主義的民主主義者との決裂）を契機にして、青年ヘーゲル派運動は統一的な運動としてはその幕

を閉じ、以後このばらばらに解体した各グループはそれぞれの運命にしたがつて歴史の中からその姿を消してゆく。さて、以上のような基本的性格をもち、その成立、発展、解体の過程をたどつた青年ヘーゲル派運動の一環に若きマルクスの精神的発展をはめこむことによつて、コルニユは、通例の初期マルクス研究の接近方法であるヘーゲル・フォイエルバッハ・マルクスなる思想的継承関係をいつそう具体的明確に規定しようと試みている。例えばこの書物においてはこのような視角から、ヘーゲルとマルクスを繋ぐ環としてチェスコフスキー、パウアーのヘーゲル批判の役割が大きく評価され、あるいは若きマルクスによるフォイエルバッハの方法の市民社会批判への適用にさいしては、これまでの研究において看過されてきたヘス、ルーゲの先駆的業績が掘り起され再評価を加えられている。以下本稿では、第三章において前者の問題を若きマルクスの「学位論文」を軸にしてとりあつかひ、第四章において「ヘーゲル国法論批判」をてがかりにして後者の問題を論じてみたい。なおそのさい、コルニユにおいて力点を置かれた他の一面、若きマルクスをこれらの青年ヘーゲル派人と区別する側面の析出、若きマルクスの論稿が全体としてそれぞれの段階においてもつていた限界の指摘にも充分の考慮が払われる。

註(1) 青年ヘーゲル派運動の成立については、コルニユは『フォイエルバッハ論』の古典的規定に従つて、*が、その推移の過程についてはかなり異つてゐる。vgl. F. Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, in K. Marx und F. Engels, Ausgewählte Schriften in Zwei Bänden, Bd. II, SS. 368-369, SS. 340-343.* 邦訳『マルクス・エンゲルス選集』一五卷四三六頁—四四〇頁、四三二頁—四三三頁。

(2) 後に述べるように、ルカーチもまた青年ヘーゲル派のヘーゲル批判の特質として、*der exoterische Hegel & der esoterische Hegel* との区別という立場を重視し、これと若きマルクスのヘーゲル批判の立場との差異を強調している。本稿第三節四〇頁—四一頁参照。

三

マルクスの学位論文、『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』（一八四一年）の哲学的立場、およびそれが彼の思想的発展の中で占める地位について、我々はこれまでの研究史において二つの顕著に対立する評価をみいだす。すなわちメーリングの評価によれば、この論文の基本的立場はヘーゲル観念論の立場にあつたが、これにたいしてリヤザノフは、彼によつて発見され紹介された「準備ノート」に注目することによつて、この論文の位置を青年ヘーゲル派の立場において把えている。⁽³⁾

城塚氏はこのあい対立する評価を「学位論文」を構成する二つの契機として評価し、その意味で両者はともに一面的な立場を代表していると批評するとともに、こゝに「学位論文」の第三の契機として「フランスの一八世紀の啓蒙思想に近い立場」、「人間の自由と主体性を主張する自由主義、感性的現実の率直な認識から出発する感性的現実主義、実証主義」をとり出している。⁽⁴⁾

ルカーチは論稿「若きマルクスにおける哲学的発展」において、「学位論文」のもつ様々な契機のうち城塚氏の所謂第三の契機をとくに重視するのであるが、問題の展開の仕方は城塚氏とやゝ異つている。すなわちこゝではすでに一言したように、分析の中軸は、後の史的唯物論、弁証法的唯物論の確立に連るモメントの析出、具体的には若きマルクスによる青年ヘーゲル派のヘーゲル批判の限界の克服と深化という視角におかれて⁽⁵⁾いる。このような問題意識から、ルカーチは考察の力点の一つを、ヘーゲル批判の方法をめぐつて生れた青年ヘーゲル派と若きマルクスとの対立、つまり「公教的ヘーゲル」と「秘教的ヘーゲル」の区別に立つ立場と「そもそものはじめからヘーゲル

の内部にある矛盾を揚棄しよう」と試みる立場の対立の析出に向けている。⁽⁶⁾かくてルカーチは言う、「すでに一八四〇—四一年に若きマルクスは原理的には青年ヘーゲル派によるヘーゲルの評価を越えていた」⁽⁷⁾と。更に「学位論文」それ自体よりひき出される論点の中心も—かゝる接近方法から当然に—若きマルクスによる後期ギリシア哲学にひそむ唯物論的伝統の発掘と弁証法的論理の発端の追跡におかれることになる。

コルニユもまた基本的にはルカーチとほぼ同じ立場に立っているが、ルカーチが殆ど論ずることのなかつた「学位論文」における所謂第一、第二の契機にもかなり綿密な考察を加えることによつて、この段階でマルクスがヘーゲル、青年ヘーゲル派から承継継いだものが何であるかをいつそう明確に擲んでいるかに思われる。しかも今一つ我々の注目をひくことは、その論証の材料として、我が国の研究ではこれまで殆ど看過されてきた「準備ノート」の緻密な分析を行っていることである。⁽⁸⁾以下これらの諸点を念頭におきつつコルニユによるマルクス「学位論文」についての解釈のいくつかに触れたい。

まず所謂第二の契機からとりあげる。この時期のマルクスの立場を「自由主義的民主主義」の時期と規定して、コルニユは言う、「マルクスの最初の政治的活動の時期においては、彼が自由主義的民主主義の運動に参加したかぎりでは、彼の精神的政治的發展は青年ヘーゲル派の枠内でおこなわれた」(S. 123)と。ところでこの時期の青年ヘーゲル派にはB・バウアーとルーゲとのやや傾向を異にする流れがあつたが、コルニユはこの段階の若きマルクスの位置は「ルーゲよりもバウアーに近いところにあつた」(S. 159)と云う。したがつてこのばあい、若きマルクスと青年ヘーゲル派との関係は、具体的には前者とバウアーの自己意識の哲学との関係として問われることになる。

マルクスの「学位論文」は、もともと後期ギリシア哲学の諸学派であるエピクロス派、ストア派、懐疑派を展望して、それがギリシア思想の発展において果たした偉大な役割を明らかにしようとする巨大な試みの一部分であった。が、それを支えている問題意識は、コルニュによれば、バウアーの自己意識の哲学の立場に近いところにあつた。すなわち、ヘーゲルはその哲学史においてこれらの諸学説をいくらか無愛想にとりあつかつたが、バウアーはその中に普遍的自己意識の新たな発展段階の表現を見出し、古代世界の解体期にさいして人間の内面的自由を確保しようとしたこれらの学説を、それが現代を想起させる抑圧の時代に形成されたというまさにその理由で高く評価した。この危機意識、きよくどに現代意識的な実践的立場からなされた後期ギリシア哲学の評価を若きマルクスはほぼ受け継いだのである。コルニュはその論証として、「学位論文」の序言におけるヘーゲルによる後期ギリシア哲学の評価の一面性の指摘と、ケッペンの労作のもつ補充的意義の強調とをあげ、あるいはマルクスによつて計画されたこの論稿の「序言」の草稿の中から、リヤザノフにより収録された次の興味ある一節を引用している。「今やエピクロス主義者、ストア主義者、懐疑主義者が理解される時代が到来した。それは自己意識の哲学である」⁽¹⁰⁾。

この時期のマルクスは、このように問題意識の面で青年ヘーゲル派に密接につながつていたばかりでなく、政治的实践への参加の仕方でも——「宗教の批判によつて青年ヘーゲル派の政治斗争に参加する」(S. 163) という形をとることによつて——またそうであつた。かかる見方からコルニュは、プルタルコスによるエピクロスの論難にたいして無神論者エピクロスの精神的倫理的偉大さを擁護した「学位論文の付録」をとりあげている。⁽¹¹⁾

若きマルクスの「学位論文」は、以上のように一面ではその問題意識、自由主義運動への参加の仕方の点で青年ヘーゲル派運動の枠内に定位せしめられるのであるが、他方コルニュによれば、マルクスは当初から彼等と対立

し、彼等を超える契機(第三の契機)をうちに含んでいた。それは総括的には次の点にある。「この斗い〔青年ヘーゲル派のそれ〕に参加するにあつて、マルクスは本質的な点で他の青年ヘーゲル派人と異つていた。彼等とちがつて、マルクスはエンゲルスと同様に、もはや自由主義的な意見をもたないで民主主義的な意見を抱いた。したがつて彼は自由主義、つまりブルジョワジーの階級的利益のためではなく、民主主義、つまり全国民の利益のために斗おうと努力した。そのさい彼には現存の状態を批判することよりもそれを実際に変更することが重要であつたので、彼は青年ヘーゲル派の抽象的理論的批判に満足できなかつた」(S. 204)。

コルニユはこのような立場から、學位論文を貫くいま一つの基線として、「かの哲学流派(後期ギリシヤ哲学、とくにエビクロス派)の立場をそのまま受入れた批判哲学を詳細に吟味して、この哲学の本質的欠陥を発見する」(S. 161)ことにより、自己の世界観により明析な規定を与えんとする志向をとりだし、問題の核心を若きマルクスによるパウアの自己意識の哲学―批判哲学との対決に求めている。ここで我々の注目すべきことは、コルニユがこの対決の分析軸を、彼の思想史的方法的特質ともいふべき独自の接近方法―そこではそれぞれの諸思想は、それがどのように「人間と環境との関係」を理論化しているか、そのさい両者を媒介する「人間の行為」―実践の構造は如何に把握されているかをめぐつて吟味され評価を与えられる―に求めていることである。ここで予め結論を先取りしていえば、批判哲学は人間を環境から切り離すことによつて、人間が環境に实践的に働きかけることを不可能にしたが、若きマルクスはこれにかわる新しい歴史観の形成の第一歩を踏み出したということが、すなわちこれである。コルニユはパウアの自己意識の哲学の理論的特質を、それが、「ヘーゲルの絶対理念、世界精神を歴史の歩みの中で段階を追つて展開される人間の普遍的自己意識に還元することによつて、神の中に人間の本質を発見したフォイ

エルバツハによく似た見解に到達した」(S. 145) 点に求めている。パウアーによれば、世界の発展にとつて重要なのはこの普遍的自己意識であつて、これにたいして実体は、普遍的自己意識が段階を追つて次第に実現される形式、フィヒテにおける非我のように自己自身の認識に到達するための手段にすぎない。ここでは精神と実体とは次のような關係に立つている。精神が一定の実体において実現されると、この実体はやがて精神がさらに発展するために、克服されねばならぬ制限、障碍となり、このようにして普遍的自己意識のあらゆる哲学的宗教的あるいは社会的外在化はただ一定の時期にのみ正当化されるのであつて、それはやがてまもなく必然的に新しいより高次のものにとつてかわられる。

歴史の運動を上述のような自己意識の運動として把えることにより、パウアーは、ヘーゲルによつて過去と現在にのみ限られた歴史の弁証法的運動を未来にまで切り開き、「哲学に未来を規定すべき課題を提起したばかりでなく、批判がどのようにしてこの課題を解決することができるかを指示する」(S. 146) ことができたが、それは同時に、精神の發展を具体的な現実から切り離すことによつて、さらに自己意識をたえず実体と対立させることによつて、ヘーゲルによつて擁護された思惟と存在との統一を粉碎し、フィヒテの主観的觀念論に還ることによつて精神活動に独断的性格を与えることになつた。⁽¹³⁾

コルニユによれば、批判によつて未来を規定するという哲学の変革的役割の強調、ヘーゲルによつて設けられた歴史の弁証法的運動の制限の破壊という点で、若きマルクスは批判哲学—自己意識の哲学の立場を承継したが（第二の契機）、他方彼等においては人間と環境、思惟と存在の結びつきが解離されている結果、環境を変革するために、これに実践的具体的に働きかけることが不可能になつている点で当初より彼等にもまた批判的態度をとつた（第三

の契機)。コルニユは若きマルクスが後に史的唯物論を確立するに至る途の発端をこの点に見ようとするのであるが、「学位論文」のはらむこの新しい世界観への萌芽ともいふべきものの核心を、彼は、「哲学は世界との相互作用において発展する」という「思惟と存在、精神と世界との間の相互作用に関するマルクスの最初の考え」(S. 169)の中に求めている。さらにこのこととの関連において、彼は、自己意識の哲学のばあいフイヒテの主観的観念論への後退によつて簡単に棄て去られたヘーゲル哲学の根本原理、つまり「弁証法的発展を實在の具体的世界、客観的精神の内的対立から導き出す精神と具体的世界との内的紐帯の概念」、「有機的發展の概念」が若きマルクスによつて再びとりあげられ、出発点の一つとなつている(第一の契機)ことに我々の注意を喚起している。

では若きマルクスは、「人間と環境との関係」のこの段階における把握形態ともいふべき「哲学と世界の関係」をどのように把えているであろうか。コルニユはこれをほば次のように要約している。⁽¹⁴⁾

世界史において、世界の具体的な状態が理性的であつて、その結果哲学が具体的な総体となつている時代がある。そのような時代は自己の表現をアリストテレスやヘーゲルの如き哲学体系の中に見出す。だが歴史の發展の推移につれて哲学と世界との統一が解体して、現実的なものと理性的なものとの二つにわかれ、そのけつか哲学は抽象的な総体として、非理性性的なものとなつた具体的な世界と対立するに至る。若きマルクスによれば、かかる時代とは例えば後期ギリシア哲学の時代であり、あるいは青年ヘーゲル派の自己意識の哲学にその表現を見出している現代であつて、時代の投げかけている課題は、哲学と世界との分離対立を再び和解させ、歴史の具体的發展を精神の合理的發展と調和せしめるにある。したがつてこの時代には、自己意識の哲学として抽象的な総体にまで下降した哲学は、批判によつて世界に再び合理的な性格を与えんとして、今や意志として世界に対立する。「哲学は世界

と対立するこの在り方において矛盾に、世界と対立することによつて抽象的な総体になるという矛盾にとらえられている。だが哲学はかかる総体として自らを実現せんとするその衝動によつて、自己自身をもまた揚棄する」。すなわち「哲学は世界において自らを実現するが、そのことによつて世界は哲学的となるのであり、そのことはまた哲学が世界にまで生成したこと、抽象的な総体としての自己を揚棄したことでもある」（S. 169）。ここに哲学と世界の対立は揚棄され、再び調和の時代が生れる。⁽¹⁵⁾

かくて若きマルクスは、「コルニユによれば」「はじめ哲学と世界、自己意識と具体的実在との対立関係として現象したものが（自己意識の哲学の立場）、より詳細な分析によつて、相互作用の関係にあること」（S171）を明らかにした。すなわちここでは歴史の発展構造は、哲学は抽象的な総体として一度は世界より分離されてこれと批判的に対立するが、この世界を變革することによつて再び世界と統一される、という弁証法的な運動構造をもつことによつて、哲学と世界というアンティ・テーゼ的要素は即自的形而上学的な固定的本質としてではなく、弁証法的な統一において理解されている。コルニユはこの点に若きマルクスと自己意識の哲学との深い裂け目、および前者のヘーゲルとの連繋を見る。彼は言う、ここでは「世界の歩みは主観的精神、抽象的な自己意識によつて規定されるのではなく、世界の内的弁証法によつて規定されるというヘーゲルの見解が保持されている」（S. 181）。だが次の点から両者の対立が生れる。「世界の発展を客観的精神の発展形態をとつた本質的に論理的な発展として考察したり、或はさらに概念を抽象的カテゴリーとして考察したりすることをしないで、これを具体的な歴史的諸関係のイデオロギーの表現形態として理解する」点で、或は哲学を精神の永遠で絶対的な定在形態とせず、「哲学の発展の中に――なお哲学的形態においてではあるが――それに固有の統一と揚棄を、つまり精神と世界との間の相互作用を認めていた」（S.

181) という点で、若きマルクスはすでに後のヘーゲル批判に至る端初をつかんでいた。

両者の対立点をコルニユは次の点にも見出す。過渡期における哲学と世界との対立の「調和」を回復するための途をヘーゲルは「順応」あるいは「適合」に求めたが、若きマルクスは「対立の尖鋭化」、「急進的方法」、「根本的な革命」に求めた。コルニユは言う、「世界史の推進力としての弁証法的対立を弱めようとする一切の調停に反対するマルクスの原理的立場がはじめて示されている」。

以上がコルニユによつて把えられたマルクス「学位論文」を構成する所謂三つの契機であつて、彼はその析出のために主として「準備ノート」を利用している。学位論文そのものの解釈、分析については、コルニユもこれまでの研究によつて提起された論点をほぼ同じ視角より論じているので、ここでは触れないでおく。ただ一つコルニユの特色を示していると思われる点は、「準備ノート」における若きマルクスのパウア批判の契機と関連せしめて、「学位論文」におけるマルクスによるエピクロスの評価(特に批判)の中にパウア批判を読みとらうとする解釈、およびそれと関連するエピクロス自体のとりあつかいであるが、これについての考察は別の機会に譲ることとする。

最後にこの段階でのマルクスの世界観のコルニユによる解釈を総括的に示しておく。彼はその限界点として、「当時マルクスはなおイデアリストであつたので、すでにフォイエルバッハがおこなつていたようにヘーゲル観念論に背を向けていず、彼自身が後にやつたようにヘーゲルの観念弁証法を攻撃せず、批判哲学の誤りにおちいることなどのようにしてヘーゲルを超えて行為の哲学に到達することができるか」(S. 166~167)を試みた点、「人間の環境にたいする関係を哲学の世界にたいする関係に還元したがために、ここではマルクスは人間の環境に対するかかりあい(Verhältnis)をなお具体的な実践としてではなく、なお観念的な実践として理解した」(S. 179)ことを指摘

している。と同時に後期のマルクスとの関連においては、それは次の如く展望される。「哲学と世界との関係についてこの弁証法的な—いまだなお観念論的であるにもせよ—見解は、マルクスにとって、やがて彼を弁証法的ならびに史的唯物論にまで導くことになる人間と環境との間の相互作用観への第一歩であつた」(S. 179)。

註(一) vgl. F. Mehring, *Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels*, 1841 bis 1850, 4Auffl. Bd. I, S. 55.

vgl. F. Mehring, *Karl Marx, Geschichte seines Lebens*, Zürich 1946, S. 54

(2) H. M. Mins の論文 "Marx's Doctoral Dissertation" は *Science and Society*, Vol. XII, No. 1, P. 168.) の註をよみてほしいと強く、彼自身もその註を承認している。(Science and Society, Vol. XII, No. 1, P. 168.)

(3) vgl. *Marx-Engels Gesamtausgabe*, erste Abt. Bd. I, Halbbd. 1, S. XXXVI.

(4) 城塚登『社会主義思想の成り立ち』四六頁—四七頁。

註(四) 近頃の立場は、K. Bekker, *Marx' philosophische Entwicklung, sein Verhältnis zu Hegel*, Zürich, New York 1940 を参照。

(5) ナカチヨウの論文は、G. Mende, *Karl Marx' Entwicklung vom revolutionären Demokraten zum Kommunisten*, Berlin 1955, を参照せよ。

(6) vgl. G. Lukács, zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx, 1840—1844, S. 291.

(7) Ebdenda, S. 291.

(8) コルニヒツカキの最近の海外の「学位論文」の研究者はおおむね「準備ノート」を重要視しているように見える。vgl. G. Lukács, a.a. O. SS. 290—295, G. Mende, a.a. O. SS. 33—39, H. M. Mins, a.a. O. SS. 166—168, K. Bekker, a.a. O. SS. 12—17.

(9) vgl. *M.E.G.A. I*, Bd. I, Halbbd. 1, S. 9—10.

(10) *M.E.G.A. I*, Bd. I, Halbbd. 2, S. 327.

(11) 学位論文附録の断片、「エピクロススの神学にたいするブルタルコススの論難の批判」にたいしては、「その内容はそれほど大したものではなく」（淡野安太郎、『初期のマルクス』九六頁）という評価があるが、コルニユはこの断片に、「ブルタルコススの宗教観の批判において、人間の自己疎外の表現としての悪と神に関する見解によつて、マルクスはパウアーを超え、フォイエエルバッハが『キリスト教の本質』で述べた見方にまで進んでいる」（S. 166）という高い評価を与えている。

(12) 例えば『マルクスと近代思想』において、コルニユはこのような視角からフランス合理主義、ドイツ古典哲学、マルクス主義の連関と発展図式を描きあげている。本書においてもこの視角が初期マルクススの思想的発展―理論的深化の一測定基準になつている。

(13) コルニユは言う、「そのためにパウアーは誤つて精神活動に絶対的な価値を与え、精神をそのままで妥当するものとして考察し、これにたいして環境を、フイヒテのやり方にならつて、精神の一時的な不断の変化の表現とみなし、あるいはまた精神がその弁証法的発展に利用する単なる手段とみなした。自己意識と具体的な現実との間の不断の対立にもとづき、彼もまた再び存在と当為との間の対立、すなわちヘーゲルが激しく反対したところの、結局は観念論にゆきつくかの対立におちこんだ」（S. 147）。

自己意識の哲学―批判哲学の基本的性格の一面を、ヘーゲルの客観的観念論よりフイヒテの主観的観念論への後退において把える古典的規定としては、Marx-Engels, *Die Heilige Familie*, Berlin 1953, S. 272. 邦訳、岩波文庫版二四〇頁―二四二頁参照。ルカーチもまたマルクススのこの古典的規定を継承してゐることについては、本稿第一節三三頁参照。

(14) メンデによれば、この「準備ノート」の骨格は、(1)ヘーゲルの彼自身の哲学にたいする関係、(2)ヘーゲル学派のヘーゲル哲学にたいする関係、(3)哲学の自己自身にたいする関係、(4)哲学の現実にたいする関係とヘーゲル学派の二つの方向への分裂の根拠、から成り立つてゐる（G. Mende, a.a. O. S. 33）。コルニユもひとわりこれら諸点にふれているが、ここでは主題に必要なかぎり述べるにとどめた。

(15) かかる「哲学と世界の関係」の把握の中に、ルカーチ、メンデは、後に『ヘーゲル法哲学批判・序説』で定式化された理論と実践（およびその主体）との関係についての有名な章句、「哲学はプロレタリアートを揚棄せずには実現されえないし、プロレタリアートは哲学を実現せずには自己を揚棄できぬ」（M.E.G.A. I, Bd. I, Halbbd. I, S. 621）とどう定式の発端、

初期マルクスと青年ヘーゲル派（重田）

初期マルクスと青年ヘーゲル派（重田）

展望を読むと（1）58。vgl. G. Lukács, a.a. O. S. 295, G. Mende, a.a. O. S. 34.

四

以上第三節の課題は、コルニユによる「学位論文」の解釈の一端をとりあげることによつて、初期マルクスと青年ヘーゲル派との関係の彼による把握の特質を、青年ヘーゲル派運動の「第一段階」においてさぐることにあつたが、本節ではコルニユによるヘーゲル国法論批判の解釈の一端に触れることによつて、さきの問題を青年ヘーゲル派運動の「第二段階」において検討してみたい。

一八四三年三月から八月までの間に書かれたと推定される若きマルクスの草稿『ヘーゲル国法論批判』⁽¹⁾は、コルニユの所謂「民主主義的社会急進主義」⁽²⁾の立場からするプロシア絶対王制にたいする斗いの一環として、この反動的体制の正当化をめざすヘーゲルによる国家の本質の觀念論的神祕化と君主制、官僚制、身分議会の合理化とに徹底的な批判を加えんと企図したものであつた。この草稿は当時彼の内部に起りつつあつた「彼の自由主義的民主主義的な発展に止めをさす生活上の弁証法的旋回」(SSS)を示すものとして、ここでは幾多の興味ある問題が提起されており、コルニユもこれを克明に分析しているが、ここではさきの主題にかんれんして後の展開に必要なかぎりでの論点だけを提示するにとどめておく。そのばあい提示される論点は次の三つである。

まず第一に、若きマルクスはヘーゲルにおける思惟と存在、主語と述語の関係をフォイエルバッハの唯物論的な立場から逆転せしめることによつて、ヘーゲル觀念弁証法の思弁的構成の祕密を暴露し、後の弁証法的唯物論の確立に至る重大な一歩を進めた。マルクスの一句、「重要なことは、ヘーゲルはいたるところで理念を主語として、…

：本来的な現実の主語を述語とした、ということである。しかるに發展は常に述語の側におこる⁽³⁾、その他をとりあげてコルニユは言う、「マルクスは、一切の具体的な現実を理念の産物と定在様式に変え、一切の現実的な諸規定を論理的形而上学的な諸規定に変えるヘーゲルの『神祕化』の機構と本質を分析している」⁽⁴⁾(S. 423)。第二に、このような唯物論的な主語と述語の関係を国家と社会の關係に適用して、若きマルクスはヘーゲルによる国家の本質の觀念論的神祕化の秘密を暴露するとともに、市民社会を創造主体とし、国家を創造された客体とした。かくしてコルニユによれば、「今や若きマルクスにとつてはヘーゲルや自由主義者達と異つて、国家は社会諸關係の發展において規定者としての役割を演じないで、むしろ国家はその主要な特徴において社会によつて規定されるように思われた」(S. 415)。

第三に、以上の二点を中心とするヘーゲル法哲学の批判的分析は、「ブルジョワ社会とブルジョワ国家の批判的分析にまで成長した」(S. 423)。すなわち、若きマルクスは、ブルジョワ国家はそれ自体の中に一つの和解し難い矛盾を含んでいることを政治国家と市民社会との対立、矛盾という定式で析出し、このブルジョワ国家は人類の眞の共同体を実現できないばかりか、さきの対立を極度に尖鋭化させるということ、あらゆる形態のブルジョワ国家の基礎は私有財産である、ということを論証した。

これらの諸点、とくに第一と第二の論点は、リヤザノフによれば、「ある程度まで決定的、直接的にフォイエルバッハの『哲学改革のための暫定的テーゼ』の影響を証拠だてる⁽⁵⁾」ものであり、この点はこれまでの「国法論批判」研究の中心主題の一つでもあつた。以下この問題、つまりヘーゲル批判をめぐる若きマルクスとフォイエルバッハの關係についてのコルニユの解釈に検討を加えることによつて本節の主題に答えたい。

かつてかなり以前に遡る時期においては、例えばプレハーノフ、リヤザノフの見解に見られるように、若きマル

クスの思想的発展の中に三つの異つた発展段階、「ヘーゲル時代」、「フォイエルバッハ時代」、「マルクス時代」（マルクス主義の確立以後）をみる見解が支配的であつた。⁽⁶⁾「国法論批判」の草稿の発見者であるリヤザノフは、このような立場からこの草稿を「フォイエルバッハ時代」に位置づけ、これを主としてフォイエルバッハの「暫定的テーゼ」との関係において解釈している。⁽⁷⁾

すでに「学位論文」の考察において言及したように、最近の研究は、「ヘーゲル時代」、「フォイエルバッハ時代」と呼ばれる時期のマルクスの論稿から、その発端において含まれている両者の批判の契機を析出することに関心を払つている。「国法論批判」の解釈をめぐつてもまた然りであつて、端的に言えば、ここでは主題としてのヘーゲル批判の問題との結びつきにおいてフォイエルバッハ批判の端初をとりだすことに分析の力点の一つがおかれて⁽⁸⁾いる。なるほどこのばあいにも若きマルクスのヘーゲル法哲学の批判は、フォイエルバッハの唯物論の継承と発展という立場からとりわけ『哲学改革のための暫定的テーゼ』との結びつきにおいて一究明されている。ルカーチは言う、「若きマルクスは、フォイエルバッハのヘーゲル批判の唯物論的視角をとりあげこれをさらに発展させることによつて、ヘーゲル観念弁証法は、みせかけは弁証法的であるが実際には思弁的な方法によつて、身分的君主制の『必然性』を論明することをえせしめるかの恣意的な概念構成を可能にした、⁽⁹⁾ということを指摘することができた。』⁽⁹⁾とはいうもののルカーチの解釈によれば、さきの一句の中の「これをさらに発展させて」という言葉が明示するように、フォイエルバッハの唯物論的立場からする若きマルクスのヘーゲル法哲学の批判はそれ自身のうちにフォイエルバッハの批判を含んでいたのであつて、彼はこの点を次のように明確に規定している。「マルクスによるヘーゲルの顛倒的批判は、それと離れ難く統一されて、フォイエルバッハの超克、換言すれば、唯物論的批判のヘーゲル社会理

論への拡大、自然に関する唯物論的な世界解明の社会諸連関への拡充、宗教批判から政治批判への移行、フォイエバッハの人間学的抽象物“der Mensch”の克服……つまり唯物論的な弁証法の創造をうちに含むものであった」と。⁽¹⁰⁾

このような見方をとることによつて、ルカーチは、ヘーゲル—フォリエルバツハ—マルクスなる思想的継承関係を次のようなかたちでとらえている。若きマルクスはフォリエルバツハの唯物論的立場からヘーゲル観念論を顛倒することによつて、ヘーゲルの社会理論の否定面を徹底的に批判したが、彼にあつてはそれは同時に弁証法のヘーゲル観念論の制限からの解放を意味するのであつて、この弁証法的方法を駆使することによつて、彼は社会理論の面ではいぜんとして観念論的であつたフォリエルバツハを乗り越え、ヘーゲル社会理論の積極面を受け継いで更にこれを発展させた。

「国法論批判」の中に中心主題としてのヘーゲル批判の契機と並んでフォリエルバツハ批判の発端を讀みとらうとする点ではコルニユもルカーチに近い立場に立つているが、その思想的継承関係をめぐり独自の接近方法をとることによつて、彼はこの問題にたいしてルカーチとはかなり異つた解釈に到達している。すなわちコルニユはフォリエルバツハの「ヒューマニズム」の立場を媒介にして若きマルクスとルーゲ、ヘスの当時の思想的立場の類似面を析出し、若きマルクスを「急進的青年ヘーゲル派」の流れの中に定位せしめることによつて、この問題を解明しようとするのである。

まず若きマルクスとヘーゲル、フォリエルバツハの関係であるが、ここでもそれは「人間と環境との相互作用観」なる視角のもとに次のような解釈をあたえられる。「マルクスは、人間は抽象的な思惟する存在としてではなく感性的具体的な存在として把握されるべきであるという点で、フォリエルバツハと完全に同じ意見であつた。しかし

彼は人間を自然との関係においてよりもむしろ社会との関係において考察したので、彼にとつては人間は、フォイエルバッハにとつてのように感傷的で観想的受動的な自然的存在ではなくて、自己の具体的な活動によつて環境を変更する能動的な要素であつた。そのさい彼は人間の発展によつて規定される歴史の弁証法的な歩みに関するヘーゲルの根本的見解を保持した。しかし彼はこの発展をもちや本質的に精神的過程として把握しないで、精神と物質、人間と環境との間の不断の相互作用として把握し、フォイエルバッハとともに歴史の発展の目標を人間の自己外在化の揚棄の中に見た」(S. 418)。

若きマルクスによるフォイエルバッハ克服の発端の一つはこの人間の自己疎外の分析という視角のブルジョワ社会の分析への適用にあるのであるが、この問題をめぐつてコルニユは若きマルクスとヘスとの関係を問うて、次のように言っている。「彼はヘスと同様に、この自己外在化はその表現を神の中ばかりでなく国家の中にも見出し、したがつてその揚棄は宗教と国家との同時批判によつてのみ行われる、と考へた」(S. 374)。かくてフォイエルバッハの克服をめぐる両者の関係は、彼等が人間の自己疎外なる現象を宗教的立場からよりも、むしろ社会的立場から考察した点をめぐつて展開されるのであるが、コルニユ⁽¹¹⁾によればヘスがまずこのこと⁽¹¹⁾に手をつけたのである。

コルニユは言う、「ヘスはフォイエルバッハから出発して、今日の社会の悩んでいる根本的な害悪は、人間を共同体から閉め出し、人間を利己的な個人と化す人間の本質の疎外であると考えた。さらにヘスは次のように考えた。フォイエルバッハによつて宗教の領域で発見されたこの外在化は決して特に宗教的な性格をもつといったものでなく、むしろそれは社会的な性格をおびたものであつて、ブルジョワ的社会制度の土台、つまり私有財産から生れるものであり、この私有財産たるや、それによつて産み出された競争と利潤の追求とによつて人間を孤立させ、相互

に對立させる。人間をこの根本的害悪より解放するためには、私有財産と利己主義との揚棄によつて自由と平等の支配する無政府主義的な共產主義社会制度を創造すべきである」(S.374)と。さてヘスの思想の特質はフォイエルバッハの「ヒューマニズム」の理論を空想的共產主義思想の根拠づけに利用した点にあるが、コルニユはその限界として、人間の外在化の揚棄と人間の共同体への参与の純粹に空想的な把握によるこの思想の「感傷的空想性」を指摘している。そのためにヘスは、ブルジョワジーとプロレタリアートとの間の階級斗争の利己主義と利他主義との斗争への還元、経済社会問題の道德問題への移転という誤りにおちいり、「利己主義との闘いを社会的斗争の本質的要素とするに至つた」(S.376~377)。かかるヘスの思想の欠陥は、後に若きマルクスにより『ドイツ・イデオロギー』において「真正社会主義」批判のかたちで徹底的に暴露されるに至るのであるが、コルニユはその発端をこの時期における両者のヘーゲル弁証法の継承の差異の中に見て、次のように言っている。「そのさい彼〔若きマルクス〕はヘーゲルとフォイエルバッハの学説を超えたばかりでなく、歴史の弁証法的發展に関するヘーゲルの見解をわがものとなしえなかつたヘスの行為の哲学をも乗り越えた」(S.418)⁽¹²⁾。

このようにコルニユは若きマルクスによるフォイエルバッハの人間の自己疎外の分析と揚棄の視角の継承と發展とをヘスとの関連において明らかにしたとすれば、フォイエルバッハによるヘーゲル批判の方法の市民社会と国家の關係への發展的適用をルーゲの先駆的試みとの関連において展開している。ヘーゲルにおける家族、社会、国家の間の關係の規定を批判したマルクスの一句、「家族ならびに市民社会の国家にたいする現実的關係は、それらの内部的な想像上の活動として把握せられる。家族と市民社会とは国家の前提である。それらが本来は活動的なものであるのに、思弁においてはこのことは顛倒される。しかるに觀念が主体化されるなら、ここにおいて現実の主

体、即ち家族、市民社会等は非現実的な他のものを意味する観念の客体的要素となる」⁽¹³⁾にも示されるように、「『国法論批判』の中心問題の一つは、「ヘーゲルの観念論的な哲学に実在の政治的社会的存在を対置する」ことであつた。これをルーゲとの関連においてとらえてコルニユは次のように言う。「そのさいマルクスはルーゲから出発して、精神と世界との間の真の関係を顛倒することにより、いかにしてヘーゲルは彼の全体系一般におけると同様に、法哲学においてもまたイデーを政治的社会的制度の創造主体としたか、そしてその結果いかにして法哲学を論理学の一部分に変えたかということを指摘した」(S.420)。

一八四二年八月に現われた『ドイツ年誌』所載の論文「ヘーゲル法哲学と現代の政治」において、フォイエエルバッハの影響のもとにルーゲがまずヘーゲル法哲学の批判を企てたのであつた。国家と国家の諸制度を思弁的立場から、つまりこれらのものを元来それを産みだした具体的な歴史的発展の外にあるものとして考察し、これらのものに絶対的理念的の性格を与えたという点でヘーゲルを批判してルーゲは言う、「国家を絶対的なものと考えること、さらに国家を歴史から切り離すことは、国家に関する一切の概念が、一般に一切の哲学それ自体が歴史の産み出したものであるがゆえに不可能である。さらに憲法、即ち特定の国家形態を永遠の形態として把握することも、特定の国家形態は精神の実存以外の何ものでもなく、しかもそのような形態をとつて精神が歴史的に実現されたものであるから不可能である」⁽¹⁴⁾と。このことを他の観点より見れば、それは歴史上の事実を論理学の範疇、つまり概念に還元することによつて、歴史を絶対化し、歴史的に規定された制度に永遠の絶対的価値を与えるものでもあつた。ルーゲは言う、「ヘーゲルの法哲学は思弁として、つまり絶対的な理論として振舞わんがために、――したがつて『批判』が強調されぬために――実存、つまり歴史的に規定されたものを論理的に規定されたものにまで高める。し

たがつて例えば国家の憲法、国家の歴史的形態、精神のこの歴史的状態もまたヘーゲルの場合には歴史的批判、つまり人類の発展の産物ではない」と。⁽¹⁵⁾このような立場からルーゲはヘーゲルにおける歴史的なものと形而上学的なものとの意識的な区別の欠如をあげ、世襲の君主、長子相続、二院制の問題をめぐるヘーゲルの動揺、これらのものを「論理的に必然的なものとして叙述しようとする試み」と「歴史の産み出したものとして論証しようとする努力」との間の動揺を指摘している。

このようなルーゲによるヘーゲル法哲学批判の解釈の上に立つことによつて、コルニュのばあい、若きマルクスによつてフォイエルバッハの唯物論的な立場から加えられた社会と国家の關係の再規定の試みは、系譜的にはルーゲ・マルクスなる発展線の上において把えられることになる。他方「急進的青年ヘーゲル派」の中で若きマルクスの占める特殊な地位とも関連する両者の対立面については、コルニュは特に言及していない。ここで我々の臆測をつけ加えて置けば、コルニュのばあい、すでに一言した両者のフォイエルバッハの繼承の仕方の一般的な差異が、つまりルーゲにおいてはフォイエルバッハからの繼承はその「ヒューマニズム」の側面に限られたのたいて、若きマルクスは唯物論的側面をも併せて繼承したということが、恐らく問題展開の軸となるのではあるまいか。

以上の叙述を要約すれば次のようになるであらう。ルカーチにあつては、「国法論批判」におけるヘーゲル批判の中からフォイエルバッハ・若きマルクスなる繼承の面をとりだすことよりも両者の対立面が強調されることによつて、ここではヘーゲル批判をめぐる当初よりフォイエルバッハとマルクスとの二つの接近方法が対立していたかの如き観を呈するのであるが、かかる位置づけを根底において規定しているは、三月前期のブルジョワ革命を目指すイデオロギーを小ブルジョワイデオロギー——青年ヘーゲル派、プロレタリアイデオロギー——マルクスなる対抗

関係に布置しようとする、ルカーチの構想であろう。もとよりコルニユも若きマルクスが青年ヘーゲル派の中で占める特異な地位についてはその都度強調しているが、彼のばあい、フォイエルバッハの唯物論的立場の継承と発展をヘーゲル派、ルーゲールマルクスなる発展線において把えることによつて、この時期のマルクスの思想的立場は総合的には「急進的青年ヘーゲル派」の流れの中に位置づけられている。したがつて、コルニユのばあいルカーチの構想する三月前期の革命的諸イデオロギーの配置図は、少くとも『独仏年誌』の廃刊とルーゲその他の自由主義との決裂以後におかれることになる。

註(1) リヤザノフによる「国法論批判」の執筆の時期のかかる推定にたいして、S・ランズフト、I・P・マイヤー、あるいはレウプアルター等は、これをもつと以前に遡らせ、一八四二年の三月にはマルクスはこの草稿を少くとも書き終えていた、と反論している。コルニユはリヤザノフの推定にそのまま従っているが、その論拠を、一八四二年(ライン新聞時代)には若きマルクスの努力の中心は、ヘーゲル哲学における革命的なものを批判的にとり出すことにあつたが、それたいて、この草稿ではヘーゲル学説の顛倒による新しい確固とした世界観的基礎の獲得が課題とされている、という点に求めらるようである。vgl. A. Cornu, a.a. O. SS. 418~419.

(2) コルニユは若きマルクスの政治的実践的立場の発展を、「民主主義的自由主義」、「民主主義的社会急進主義」(または「社会的民主主義」)、「共産主義」の三つの時期に区別している。ふつう革命的民主主義の時期に概括されている時期をさきのような二つの時期に区別する考え方、これらの概念規定の曖昧さをたいしては若干の批判が提起されている。vgl. Joachim Höppler, Über das Verhältnis des Marxismus zur Philosophie Hegels, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 4 Jahrgang, Nr. 3, S. 304.

(3) M.E.G.A. I, Bd. I, Halbbd. 1, S. 410. 邦訳『マル・エン全集』一巻二五六頁。

(4) ただしコルニユによれば、かかるヘーゲルの哲学的原理そのものの批判的追求は、なお「民主主義的社会急進主義」の立場からするヘーゲル法哲学の批判に従属していたのであつて、前者は「一年ほど後に『経済学哲学手稿』においてはじめてなされた」(S. 419)。

- (5) M.E.G.A. I, Bd. I, Halbbd. 1, S. LXXII.
- (6) この点については評論を必要とするが、ここではさしあたりリヤザノフについては、名和統一「マルクス主義とヒューゼニスム」(森宏一編『現代ヒューゼニスム』一三九頁以下)、フレハーンフについては、Palmiro Togliatti, Von Hegel zum Marxismus, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 4 Jahrgang, Nr. 5/6, SS. 629~630 参照の如し。
- (7) M.E.G.A. I, Bd. I, Halbbd. 1, S. LXXII—LXXIV.
- (8) かかる立場から「国法論批判」をあげたものとしては、ルカーチの論文の他に例えば、W. A. Turetzki, *Die Entwicklung der Anschauungen von Marx und Engels über den Staat*, Berlin 1956, SS. 20~30 長州二二「M・マルクスの『ヘーゲル国法論批判』について」(『横浜国立大学紀要』一九五三年)がある。トベツキーによれば、若きマルクスのこの論稿の分析の中心は、「社会と國家の相互作用に関するヘーゲルの神秘的觀念論的問題提起の暴露」(「マルクス主義的な唯物論的國家理論の最初の基礎の設定」(S. 22) があり、そのさい若きマルクスとフォイエルバッハの関係について次のように言う、「と同時に、……マルクスは、ヘーゲル法哲学および当時つまり一八四三年にそうであった現実の批判を、さわゆる『フォイエルバッハの立場』からおこなった」と主張するのは誤りであろう」(S. 27) 。
- (9) G. Lukács, zur Philosophischen Entwicklung des jungen Marx, 1840—1844, S. 306.
- (10) Ebdenda, S. 304—305.
- (11) コルニユは若きマルクスとヘスとの密接な関係を次の点でも明らかにしている。すなわち、國家の本質を「抽象的普遍」において捉え、これを「政治的憲法」に還元するヘーゲルに対する若きマルクスの批判に触れて、コルニユは言う、「同様の國家にたいする見方は、ヘスが論文『社会主義と共産主義』において展開したところであった」(S. 429)。
- (12) この点について、コルニユはこれ以上たもいていないが、恐らくはパウアー批判でも問題になったヘーゲル哲学の根本原理、「弁証法的發展を現実の具体的世界、客観精神の内的対立より導きだす精神と世界の内的紐帯」の繼承をめぐる問題であろう。本稿第三節四五頁参照。
- (13) M.E.G.A. I, Bd. I, Halbbd. 1, S. 406. 邦訳『マル・ヘン全集』一巻二五二頁。
- (14) A. Ruge, Die hegelische Rechtsphilosophie und die Politik unserer Zeit, vgl. A. Cornu, aa. O. S. 319.
- (15) Ebdenda, vgl. A. Cornu, aa. O. S. 320.

初期マルクスと青年ヘーゲル派(重田)

五

以上最近の初期マルクス研究の動向を念頭におきながら、コルニユによる初期マルクスと青年ヘーゲル派との関連の把握を中心に、彼の初期マルクス研究の特質の一端をさぐることにより、この研究にたいするコルニユの貢献を明らかにしてきた。以下問題点と思われるもの二、三を摘出することによつてこの稿をむすびたい。

まずコルニユの著書を全体として貫く方法の問題をとりあげる。一論者も言うように、一般に社会思想史の研究は、「社会問題への志向をめやすとして思想の展開、葛藤をつかむことにある」とすれば、まず「それぞれの社会がうちにはらむところの問題点を機構的につかんでかかる」ことが必要であり、そのためには明示的にせよ黙示的にせよ、社会生活の現実的機構的分析が前提されなければならない。⁽¹⁾ たしかにコルニユもかの時代の社会的生活の現実的機構の分析を一応おこなっている。だがそれはこれまでの公式的見解を簡単に要約したにすぎぬものであつて、それとこの書物の叙述の中心ともいうべき時代の政治的諸思潮および哲学的見解の解明、これら諸イデオロギの展開の中で若きマルクス（エンゲルス）の思想的発展をとらえようとする試みとは有機的に結びつけられているとはなお言いがたい。

なるほど思想の歴史的社会的被制約性⁽²⁾階級性を前提にすれば、⁽²⁾少くとも進歩的諸思想については、我々は一定の意味でこれらの諸思想の間の継承・発展関係を明らかにすることができるし、⁽³⁾かかる接近方法は、これまでの機械的公式的なイデオロギー論における下部構造の上部構造への「反映論」を乗り越えるためにも充分に関心を払われるべきであろう。この点でコルニユの書物における試みは高く評価されねばならない。だがコルニユのばあい、

さきの現実的機構的分析の弱さは、思想史研究の出発点となり帰着点ともなる思想の歴史的社会的被制約性の規定面である種の曖昧さを生んでいるのであつて、この欠陥はやや公式主義的臭いはするが次の批判を生んでいる。「絶対主義的専制的な状態にたいする強力な反対派の登場、自由主義的、ついで革命的民主主義的運動の成長の深刻な諸原因がたしかに指示されてはいる。だがこの発展の合則性の一般化と彫琢はなお欠けている。この欠陥はまたドイツ古典哲学の研究にさいして、客観的諸条件から遊離しているかの如き印象が生れ、哲学の階級的制約性が明らかにされぬ根拠にもなつている」⁽⁴⁾。

我々は例えはそのことを第二節でとりあげた青年ヘーゲル派の基本的性格の規定においてみるであらう。そこでは青年ヘーゲル派の思想の進歩的革命的性格とそのイデオロギ的性格||小ブルジョワ的制約性との関係、とくにブルジョワ的革命的要求がなぜ宗教的扮装をとつて表現されざるをえなかつたかという問題が、なおその社会的階級的基盤から具体的に統一されてつかまれているとはいえず、両者の統一はなお機械的抽象的であるかに思われる。さらにヘーゲル—青年ヘーゲル派—マルクスというヘーゲル哲学の継承・発展関係についても、この継承・発展の仕方を究極のところその深部において決定するのは、その時代の歴史的社会的な発展方向と継承者の社会階級的立場であるが、コルニユにおいてはさきの三者の系譜的關係をその社会階級的立場の変遷との関連において具体的に首尾一貫して把えるという点では甚だ弱く、その結果それぞれの立場の階級的基礎の規定は、これまでの公式主義的な下部構造の上部構造への「反映論」とは逆な意味でなお抽象的であるかに思われる。

第二に、コルニユは若きマルクスの思想的発展を主として史的唯物論の形成史という視角からとりあげているが、そのさい彼は『経済学批判』の「序文」におけるマルクスによる自己の思想的遍歴の歴史的回顧をてがかりに、この

問題を若きマルクスにおけるブルジョワ社会の諸問題の考察の立場の深化として捉えようとしている。「哲学的政治的立場」、「法律的政治的立場」、「政治的社会的立場」、「経済的社会的立場」という若きマルクスの思想的発展図式がすなわちこれであり、この思想的発展のそれぞれの段階における理論的深度を測定する基準として設けられるのが、「環境と人間の関係」、両者を結ぶ環としての「人間の行為」——実践の構造というコルニユの近代思想の評価基準である。かくして彼のばあい、若きマルクスの思想的立場の発展図式は、具体的には「環境と人間との相互作用」観の理論的精緻化の過程として現われる。例えばコルニユは「学位論文」から「国法論批判」への発展を、「精神(哲学)と世界の関係」という問いかたの「国家と社会の関係」という問いかたへの「環境と人間の関係」をめぐる問いの構造の変化、およびその内容把握の深まりにおいて究明しようとしている。

ところで「人間と環境」、両者を媒介する「人間の行為」というコルニユの初期マルクスの思想的発展の評価基準は、勞働⇨実践こそ人間の根源的な存在の仕方であり、これを媒介にして人間は社会諸関係の主体客体の同一性となる、というルカーチのマルクス主義的「社会存在論」への接近の仕方を想起せしめるかもしれない。総じてこのような接近方法の特色の一つは、マルクス主義における客観主義的偏向の克服をめざすものとして、弁証法的唯物論、史的唯物論の公式主義的呪縛より我々を解き放つのに甚だ有効であり、とりわけ初期マルクス研究においては、餘り豊かな成果を約束する示唆するところの多い研究方法である。だがしかしこのような立場からのみ弁証法的唯物論、史的唯物論をとりあげることが、——とくにコルニユのばあい——これを「人間と環境」、「精神と物質」の間の「相互作用観」に解消せしめる恐れがないとはいえない。ともかくその意味で、これらの接近方法が『ドイツ・イデオロギー』以後のマルクス、とくにエンゲルスの思想的発展をどのようにとりあつかうかはまことに興味のある

ところであり、それはまたかかる接近方法の試金石ともなるであろう。ともあれ少くともコルニュのばあい、さきに述べた危険がすでに現実存在しているかに思われる。すなわち、彼においてはさきの接近方法を近代思想の評価基準とするために唯物論の範疇規定が曖昧となり、そのことはすでに述べた当時の社会機構分析の弱さにもとづく思想の歴史的社会的被制約性の規定の抽象性と結びついて、一般に「客観的観念論」として規定されているヘーゲル哲学の基本的性格は、次のような折衷主義的特徴づけをあたえられている。「ヘーゲル学説は事実上、一切のものを超世界的なものからみちびきだそうとする先験的観念論と、世界の発展をそれ独自の特質から解明しようとする唯物論との妥協をかたちづくっている」(5.45)。

すでにくりかえし述べたように、コルニュの初期マルクス研究にたいする貢献の一つは初期マルクスと青年ヘーゲル派との関係をいつそう具体的に明らかにした点にあるのであるが、さきの方法論上の疑問を考慮にいれたばあい、青年ヘーゲル派の評価についてもなお検討の余地が残されているのではあるまいか。事実マルクス主義的立場よりなされた若干の書評は、コルニュのこの書物のなしたげた業績をきわめて高く評価しながらも、本書の欠陥としていつせいにこの点をとりあげている。⁽⁶⁾例えばセレスネフは総括的に次のように言っている。「著者は青年ヘーゲル派の世界観を理想化して彼等の意義を過大評価している」と。⁽⁷⁾そのさいもつとも問題をはらみ、セレスネフその他が精力的に批判しているのは、コルニュによるヘスのマルクス、エンゲルスに与えた影響の評価の問題である。コルニュの初期マルクス研究の特質の一つは、若きマルクス(エンゲルス)の思想的発展、とくに急進的民主主義の立場から共産主義の立場への移行を、ヘスによる空想的共産主義思想とドイツ古典哲学、とりわけフォイエルバッハの哲学との結合の試みを媒介にして把えようとする点にある。ところでこの見解の発端はすでに彼の一九三

四年の著作に見出される。コルニユは近年彼自身のそれまでの初期マルクス研究にたいして若干の自己批判おこなったが、ヘス—マルクスなる線はいぜんとして固執されたまま現在に至っている。セレズネフはこの点をコルニユにおける「社会民主主義的な著作家への依存の残存」として評価し、「ヘスがエンゲルスの精神的発展に、また部分的にはマルクスのそれにある種の影響をあたえたことにはなんら疑いはない。だがその影響を過大評価してはならない」と批判している。だがセレズネフの批判の論拠も解釈のいかんによつてはなりたがたいものであり、今(9)はこの点についての早急な判断はさしひかえられるべきである。

ともあれ、セレズネフも青年ヘーゲル派のマルクス主義の形成にはたした役割は一定の限度において認めているのであつてみれば、問題はその評価の程度いかにかかっている。それに答えるためには我々自身の手による青年ヘーゲル派の文献の再検討論がなされねばならない。

註(1) 坂田太郎、「わが国における教科としての『社会思想史』」(『一稿論叢』三七巻四号、四二二頁)参照。

(2) 「道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギーおよびそれらに対応する意識形態」は、「究極的には、独立の発展史をもたないが、その古典的典拠としては次のものを参照せよ。Marx-Engels, *Die deutsche Ideologie*, Berlin 1953, S. 23. 邦訳、岩波文庫版三二二頁。

(3) ルカーチによれば、非合理主義的思想にうつては「このことはあつてはならない」vgl. G. Lukács, *Die Zerstörung der Vernunft*, Berlin 1955, SS. 82—83. 邦訳、上巻七二—七三頁。

(4) *Einheit*, Nr. 8, 1955 S. 842.

(5) ルカーチのかかる特質にうつてはさし当り *Der junge Hegel* 第四章、第四節、「精神現象学」の哲学的中心概念としての『外在化』(SS. 611—646)に詳しく。なお平井俊彦「ルカーチにおける社会存在の理論」(一)、『経済論叢』八〇巻一、二号)参照。

- (6) コルニユのここをとりあげた書物の書評としては次のものがある。①『歴史の諸問題』一九五六年四号、(K・L・セレンネフ)『*Gesellschaftswissenschaftliche Beiträge*, Heft 10, 1956, に独断。』② *Einheit*, Nr. 8, 1955, (L. Arnold, E. Str-and, G. Wisotzki) ③ Marx in Perspektiven, *Merkur*, Nr. 94, 1955, SS. 1180~1183, (J. Habermas)。
- (7) K. L. Selesnjow, *Gesellschaftswissenschaftliche Beiträge*, Heft 10, 1956, S. 1319 ~1320.
- (8) vgl. A. Cornu, Über das Verhältnis des Marxismus zur Philosophie Hegels, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 2 Jahrgang, Nr. 4, SS. 894-896. ここでは①マルクスを過度にヘーゲルに依存させ、ヘーゲルにたいする対立面が殆ど究明されていないこと、②マルクスのパリにおける階級斗争にたいする参加が、彼の新しい世男観の仕上げに与えた影響が十分に明らかになされていない、という二点で、旧著『マルクスと近代思想』が自己批判されているにすぎない。
- (9) K. L. Selesnjow, a.a. O. S. 1324.
- (10) セレンネフのコレニユにたいする反論の論拠は三つに大別できるが、そのうちもつとも重要なものは、一八八八年一月二五日付ペーネル宛のエンゲルスの手紙である。そのなかでエンゲルスは、一八四〇年代のドイツの精神状況について三つの傾向を指摘している。①ワイトリングの名前と結びついたもの、②ハスによつて、部分的にはグリーンその他一連の文筆家によつて擁護されていた「真正社会主義」、③「我々の傾向」、つまりマルクス、エンゲルスの傾向、がすなわちこれであつて、これらの諸傾向の間には殆ど結びつくところはなく、したがつてそれらは「それぞれ独立に考察されたほうがよい、」とエンゲルスは言っている。エンゲルスのこの提言をとりあげて、セレンネフはコレニユがかれの書物でマルクス・エンゲルスを「進歩的青年ヘーゲル派」の枠内にいれて考察しているのを批判している。だがしかしエンゲルスのこの提言は、一八四五年の『ドイツ・イデオロギー』執筆前後のドイツの社会主義イデオロギーの配置図を指しているとも解釈しうるのであつて、若しそうだとすれば、コレニユにたいする批判の論拠とはなりがたいであらう。